
絶望

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶望

【Nコード】

N5981M

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

20枚完結予定です。

珍太郎・・・34歳。学習塾「パイナップル学園」の講師（非正規労働者）。メタボリックな34歳。独身（低所得すぎるのだ）ロリ華のことが好き。

ロリ華・・・12歳。珍太郎の勤務する塾に通う、ちびな小学生。独身（当たり前か）珍太郎のことが好き。

ロリ華のことはもうあきらめた。法的にあかん。道徳的にもーあかん。ロリ華は小学六年生で、オレは34歳である。どー考えてもダメ。

「ロリ華。別れよう」

「ええ？なんで？やだよ」

ロリ華はレモンスカッシュをちゅーちゅー吸いながらぷりぷり怒っている。オレはコーヒーをすすする。

「ひょっとして珍先生」

「ん？なんだい？」

ロリ華の顔が青くなってる。

「この前、珍先生のアパートに行ったとき、ロリ華、おならしたでしょ。あれが原因なの？」

オレは思わずコーヒーを吹き出しそうになった。何じゃそれ。

ロリ華の表情は真剣そのものである。

うーむ。この際、それが原因ということにしておくか。

「そ、そうだよ。先生はおならをする女は嫌いなんだ」

「そんなあ」

ロリ華は今にも泣きそうである。やべ。言い過ぎたかな。

「あのその」

「ひっく。ひっく」

ああ。憂鬱だな。子どもは純粹だからめんどくさいな。

「うんその。そうだね。別れる前に一回だけ遊園地行こうか」

「ほんと？」

あら。泣きやんじやった。

「うん。ジェットコースターとか乗ろうよ」

「やったー」

目を輝かせてるロリ華。えへへなんて笑ってレモンスカッシュをちゅーちゅー吸うロリ華。

ああ。やっぱり、か・わ・い・い。

本当は別れたくないんだけどなあ。法的にあかんわけよ。マジで。そんなわけで、オレとロリ華は、駅前広場で待ち合わせした。

「遅いなあ」

オレは腕時計をちらちら見る。

「珍せんせーい」

あ。ロリ華の声。

「うわ」

ずがああああああああああん。

ヘリコプターがマックに突っ込んだ。炎上してる。

「あのねえお父さん。いけないですよ。子どもにヘリコプターなんて運転させたら」

「すみません。すみません」

オレは警官にぺこぺこ頭を下げる。ロリ華もうなだれてる。ちえ。

オレ、お父さんじゃなくて、彼氏なんですけど。

でもそんなこと白状したら逮捕されてしまうからなあ。ここは話を合わせておかないといけない。

「ロリ華。いつヘリ運転するようになったんだよ」

「えへへ最近。珍先生びっくりさせようと思ってナイショにしてたんだ」

「びっくりさせすぎだよ。もう。バカ」

あ。またロリ華泣きそう。

電車の乗客がじろじろオレたちを見る。ああん。もう。子どもは難しい。

「ロリ華、遊園地に着いたらアイスクリーム買ってあげるよ」

「本当？ やったー」

ああ。すぐに元気になった。単純なやつだなあ。

「わーい。わーい。早く着かないかなあ」

ロリ華が窓を向いて、足をばたばたさせている。

か・わ・い・い。

まったく法律のバカ。なんでオレたち好き合ってるのに、結婚できないんだよ。ちきしょう。いやになる。

ロリ華の肩を抱きたいが、そんなことすると乗客が不審に思うし。まったくいやになる。

憂鬱だなあ。

そんなこんなで、駅を下り、オレたちは遊園地に向かって歩き始めた。

腕は組む。まあ。親子という設定なら大丈夫でしょう。

さすがに腰に手を回して歩いたりはできないけど、まあ贅沢は言わない。ロリ華と歩けるだけ幸せだ。こんなところ、塾の生徒に見られたら厄介だな。

「ああん。いい匂いがする。お腹へった」

「わあ。ほんと。ほれ見てみい。焼き鳥屋さんがあるよ」

オレとロリ華は、どうするどうすると言い合った。ここで食べてしまうと昼飯がちよつとなあと思ったのだ。でも、焼き鳥の匂い、すげえ。めっちゃいい匂い。

「珍先生。一本だけ食べよう」

「そうだね。一本だけならいいか」

オレとロリ華は焼き鳥屋で、もも串と豚カルビ串を買った。

「まいど」

「わあ。いい匂い。すごくいい匂い」

「本当。たまらんねえ」

2

というより、オレはロリ華が食べたい。。。

しかし、そんなの無理。人間を食べることはできない。

ロリ華が旨そうにもも串を食べてるのを見ながら、自分の指をロリ華にかじられてるのを想像した。

ああん！萌え萌え！

変な汗が出てきた。

「珍せんせーい。食べないのー？」

「う、うん。オレ急に食欲が。ロリ華、オレの分も食べていいよ」

「やったー」

実に旨そうに食べる。

オレは指をかじられてるのを想像しすぎて、ホンモノの指を確認した。ああ。よかった。ついてる。

オレとロリ華は、開園まで時間があるということで、遊園地の近くにある、小説喫茶に入った。

漫画喫茶じゃないよ。小説喫茶。よく潰れないなあと思う。小説人口が減ってるからね。

からんころーん。

「いらっしゃいませー」

店内にはすげえ数の棚があり、全部小説なのだ。最近のケータイ恋愛小説だってあるし、ガルシア・マルケスだってある。なんでもある。

でも、客はいない。そろそくだわな。漫画しか読まない客は入らないし、小説が好きな客も図書館へ行く。喫茶店に入れば座料をとられるからね。図書館は無料だ。

「注文はよろしい？」

「あたし、レモンスカッシュー」

「オレ、コーヒー」

オレとロリ華の共通の趣味は、小説だ。オレもロリ華もたくさん読むし、たくさん書く。

ロリ華が持ってきた本を見てびっくりした。

「お、お尻くん！！！」

伝説のカルト小説「お尻くん」ではないか。昭和時代に大人気だったお下品児童小説である。お尻の顔から手と足が突き出したお尻くんが活躍する話。お尻くんは緊張すると尻の穴（顔）からうんこをぶりぶりしてしまう。あまりに下品なので、絶版になっている。オレも小さい頃は何巻も持っていたが、全部おふくろに捨てられてしまった。

「すげえなあ」

「えへへへえ。面白そう」

「じゃあ、オレも借りてこようかな」

オレは席を立ち、外国文学コーナーに回った。

「マルケスは読んだしなあ、ドストエフスキーも読んだしなあ。ん？」

めちゃくちゃでかい本が一冊だけ飛び出してる。サイズにするとA3くらい。黒い装丁だ。

「なんだこれ」

重い本を開いてみると、白紙。

どのページ開いても白紙。

「珍せんせートイレどこー」

「ロリ華、ちょっとこれ見てごらん」

「なーに」

ロリ華が寄ってきて、「も、もれちゃうよう」と言った。

モレちゃうヨウ。

急に本が光った。

周りが一瞬嵐になり、稲妻が走った。

「うわあああああああ」

「きゃあああああああ」

オレとロリ華はあっという間に開いた本の白紙ページに吸い込まれた。

小説喫茶の床に、本が転がった。

3

マスターは本を片付けた。
ぷるるるるる。

携帯が鳴る。マスターはメールを眺めた。

「あっ河野さんからだ」

送信者・河野夜兎

件名・陽介！緊急事態！

猫バカの子供が生まれた！お祝いしたいから買い物つきあって！

マスターはふふふと笑う。猫バカというのは河野さんの親友。猫が
アホみたいが好きだからそう呼んでる。

なんと猫バカはついに母親か。

マスターは店を閉め、河野さんのアパートまで原付で飛ばした。

「あっ陽介。早かったね」

「うん。どうせ店ひまだから。河野さん、ほら頼まれたやつ」

「ありがとう」

河野はマスターからエロ本を受けとる。実は河野はオナニーが大好きな女子で、しかしおかずにないのでたまにマスターに買ってきて
もらうのだ。

しかし、河野はちと危険な女であった。ショタコンなのだ。エロ本
というか、男子小学生が上半身裸の写真がたくさん載ってる雑誌を
もらった。

とはいえ、マスターも危険である。マスターはロリコンだ。さすが
に女子小学生のおまんこ画像は犯罪なので持ってないが、水着写真
集はたくさん持っている。

似た者同士というわけだ。二人とも独身。河野は小さい頃親に捨てられ施設に預けられていた経験があるので結婚に少し抵抗がある。マスターの場合は、十年前に失恋して以来、セックスをしていない。小説家になるまで女禁止にしたのだ。

「河野さん。弁当もついでに買ってきただけど食べるかい？」

「わあ。ピンチョンコロリン弁当やん。すげえ」

一個1500円もする。辛さの効いたマッチョリモンゴー共和国の民族料理である。

河野は実に旨そうに食う。マスターはうふふと笑う。
マスターのお腹がぐうと鳴った。

「あっ自分だけごめん」

「気にしないでよ。オレ、ダイエットしてるから」

本当は金がない。小説喫茶はあまりもうからない。

「よし。ペッピリボンバー作ってあげるよ」

「本当？ やったー」

ペッピリボンバーは安上がりだがむちゃ旨い。モッコリコリッポ王国の民族料理である。

「でも今、冷蔵庫に材料ないから、今からスーパーに行こう陽介！」
「うん！」

二人は腕を組んで歩く。二人とも結婚する意志はないのだが、仲がいい。河野も実は小説を書いている。無論、河野は愛知県にある工場に社員として勤務しており、マスターと違って趣味志向だが、しかし小説は大好きで、図書館通いはかせない。マスターの小説のよき理解者である。

河野に「面白い小説だね。すごいね。えらいね」となでられるとマスターはやる気になる。母親的存在だ。マスターはいわば河野の赤ちゃんなのである。

前からやくざが歩いてきた。

「うわ。やべえやつきたな。怖いよ河野さん」

マスターは河野の影に隠れてびくついてる。

「んもう陽介は怖がりねえ」

やくざはポケットに手を突っ込んで、道にペーっとつばを吐きながらふらふら歩いてる。

「ちっ親父のやつ、びびりやがって。そんなに西山組のやつらが怖いのかよ。けっ」

西山組の事務所。

「おい。田中組のやつら、まだ逆らってきやがるか」

「へい。なかなかしぶといやつらで」

「早く叩き潰せ」

「へい」

やくざとすれ違ったとき、マスターは、やくざが手帳を落としたのに気づいた。

「あ、あの」

やくざは気づかずにそのまま歩いていってしまった。

マスターは手帳を開いた。

「何か書いてあるのー陽介」

「わかんねえ。白紙だ」

「ねえ陽介。あたし急にしっこしたくなってきちゃった」

「えええ。スーパーまで我慢しなよ河野さん」

「も、もれちゃうよう」

モレチャウヨウ。

急に稲妻が走り、河野とマスターは手帳の中に吸い込まれた。

「うわあああああ」

「きゃあああああ」

アスファルトには手帳だけが転がっていた。

やくざは、女の部屋に行った。

「やつちゃん。疲れてるねえ」

やくざは膝枕されながら、つぶやく。

「まったく、本当にやくざというのも心労が多いよ」

「よしよし」

女に頭をなでられるとほっとするのはやくざも一般人と変わらない。

「じゃあ。気分転換に、寿司屋に連れてってあげる。回らない寿司屋よ」

「えっいいのかい」

やくざは上を見上げる。女の笑顔。癒される。

「うん。給料日だから」

「やったー」

女とやくざは腕を組んで外へ出る。

「わあ。風が気持ちいいねえ」

「ほんとだな」

寿司屋へ向かう途中、前から男が走ってくる。

「はあはあ。印刷所に間に合わない！間に合わない！」

某出版社の編集者である。抱える封筒の中には原稿が入っている。やくざにぶつかった。

「いてえ」

「ひっ」

封筒がアスファルトに転がった。

「てめえ。この野郎」

「ごめんなさい。ごめんなさい。急いめますので。ごめんなさい」
編集者はあわてて去った。

「なんだよ、あいつ。変なの。ん」
あわてすぎて封筒を忘れたままだ。

「あっあいつ。むむむ」

もう編集者の姿はない。

「なんだよ、これ」

やくざは封筒を開けて中身を見る。

「なんじゃこれ。白紙やん。真っ白やん」

「ねえ。やっちゃあん」

「なんだよう」

「あたし、急におしっこしたくなってきちゃった」

「えええええ。もうすぐ寿司屋に着くから我慢しなよ」

「も、もれちゃうよう」

モレチャウヨウ。

急にぴかっと稲妻が走り、女とやくざは白紙の原稿に吸い込まれた。

「うわああああああああああああ」

「きゃああああああああああ」

アスファルトには、封筒と白紙の原稿だけが転がっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5981m/>

絶望

2010年10月9日17時52分発行